

A Love Supreme

至上の愛



©Anne Van Aerschot



©Anne Van Aerschot

Mitten wir im Leben sind/ Bach6Cellosuiten

我ら人生のただ中であって／バッハ無伴奏チェロ組曲

「見えないもの」に触れる—敬虔な祈りのようなダンス

ダンスと音楽の関係を探求する振付家

アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルの新たな挑戦。

ジャズとクラシックに振り付けられた

ローザスの2作品が、待望の来日公演を果たす。

「コルトレーン／黄金のカルテット」との時を超えたセッション

<A Love Supreme～至上の愛>は、1964年に録音されたサクソ奏者ジョン・コルトレーンの代表的アルバムである。コルトレーンの他、演奏に当たったのはピアニストのマッコイ・タイナー、ベース奏者ジミー・ギャリソン、そしてドラマーのエルヴィン・ジョーンズ。当時「黄金のカルテット」と称されたこの4人が神への愛をテーマに全身全霊で臨んだ演奏に、ローザスの4人の男性ダンサーが挑む。

冒頭、装飾を排した何も無い舞台上に彼らは現れ、静寂の中で踊り始める。やがてそこに、音楽が満たされるが、それはただの音楽ではない。呪文のように「A Love Supreme…」と呟く4人の奏者達の声と共に、半世紀以上前の録音スタジオに満ちていたであろう異様な熱気と強度がダンサーと観客の身体に響き渡る。ダンサーたちは、各楽器の音のアクセント、リズム、強弱など演奏の微細なニュアンスに感応しながら、身体という楽器によって、このセッションに加わる。不思議なのは、所々4人のダンサーが主体的な意図や個人を越えて、『至上の愛』を貫く見えない力に「踊らされて」いるようにも見えることである。ケースマイケルは「ある部分では、動きは意識的に選ばれているけれど、その他の動きは彼らの中に『起こる』のです」と言う。

コルトレーンの楽曲《至上の愛》は<承認><決意><追求><賛美>という4つのパートから成り立ち、それ自体一つのドラマトルギーを内包している。ダンサーたちはこの曲の進行につれて、極度の集中状態に到達しているように見える。そのプロセスを見る時、《至上の愛》をこれまで聞いたことのある者にとっても、この演奏が全く別様に聞こえてくるのではないだろうか。敬虔な祈りのようにも叫びのようにも聞こえるコルトレーンのサクソの音色に共鳴しながら展開するダンスは圧巻である。

「聞こえない音」と「見えない死」に触れる共同作業

『我ら人生のただ中であって／バッハ無伴奏チェロ組曲』はローザスと世界的チェロ奏者ジャン＝ギアン・ケラスとのコラボレーション作品である。世界中の一流ホールから引く手あまたのケラスの生演奏が聴けるというだけでも貴重であるが、ケースマイケル自身を含むローザスの5人のダンサーがその音楽をどのように解釈して踊るのが見どころである。

ケラスは音楽を緻密に解釈したケースマイケルの作品に出会い、ダンスに対する認識を一新したと言う。「今まで見てきたダンス作品が大抵魅力的なものに思えなかった理由は、音楽と振付の間に満足できるようなつながりが見出せなかったからだと思う。けれどケースマイケルは作曲家のような方法でダンスを創っていて驚かされた」とケラスは振り返る。対してケースマイケルは「ケラスの音楽にアプローチする時にはいつも憤り深さと畏れを抱いています。彼ほど抽象的な感覚を具体化することに成功している音楽家は見当たりません」と述べている。このように、互いの深いリスペクトに基づいてこの作品の創作は進行し、2017年に初演を迎えた。

ケースマイケルはこれまでも『ツァイトウング』(2008)、『パルティータ2』(2013)などバッハの楽曲に振り付けることに挑んできたが、本作におけるバッハの解釈に関しては、バッハを偏愛するケラスから大いに影響を受けているようだ。稽古場でケラスが「無伴奏チェロ組曲のメロディの下には『聞こえないベースライン』が隠れている」と言った時、ケースマイケルは即座にそれを紙に書き出すように求めたというエピソードがある。本作では、「聞こえない音」がダンスによって露わになる瞬間が立ち現れてくることだろう。

ところで、本作のタイトルは、中世キリスト教のラテン語の賛美歌をマルティン・ルターがドイツ語に翻訳した歌詞から取られている。敢えて言い落としたのではないかと推測するが、本来「我ら人生のただ中であって」の後には「死に取り囲まれている」と言う言葉が続く。本作では、「聞こえない音」と共に、「見えない死」の深淵を感じさせる生の飛翔が見られるのではないかと期待している。

文：越智雄磨

「A Love Supreme～至上の愛」
5月9日(木)～12日(日) プレイハウス

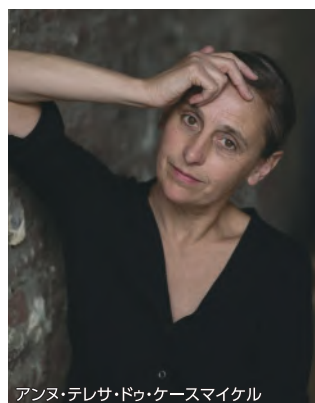
詳細はP13へ

振付：サルヴァ・サンチス／アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル
音楽：ジョン・コルトレーン<A Love Supreme～至上の愛>
出演：ローザス

「我ら人生のただ中であって／
バッハ無伴奏チェロ組曲」
5月18日(土)・19日(日) プレイハウス

詳細はP14へ

振付：アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル
チェロ：ジャン＝ギアン・ケラス
音楽：J.S.バッハ<無伴奏チェロ組曲> 出演：ローザス



アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル

©Hugo Glendinning

「ボッコちゃん ～星新一 ショートショートセレクション～」

韓国語上演・日本語字幕付

脚色・演出:チョン・インチョル

舞台に広がる 星新一の世界

韓国現代演劇を牽引する、
韓国ナショナル・シアターカンパニー初上陸。
星新一のショートショートを
カンパニーの力を集結させ舞台化。

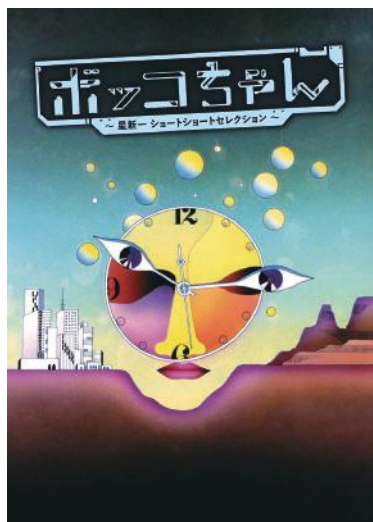
1950年に旗揚げした韓国ナショナル・シアターカンパニーは2010年、それまで本拠地としていた韓国ナショナル・シアターから独立する際に、運営や制作体制を刷新し、明洞芸術劇場(2015年)、ペクソンヒ・チャンミノ劇場、小劇場パンの3劇場で「ナショナル」という名にふさわしい作品を次々と作り出し、今や韓国でもっとも注目を浴びている。今まで中国、フランス、イギリスで公演を行ってきたが、いよいよ「ボッコちゃん～星新一 ショートショートセレクション～」で初めて日本での上演を果たす。

日本の方の多くはタイトルを聞くだけで原作者の星新一を思い出すと思うが、韓国で星の作品が紹介されたのは、比較的最近のことだ。初めての韓国語版出版は1998年だったものの、広く知られるようになったのは星の著作が33冊のシリーズとして出版され始めた2008年。書かれた時代を連想させない現代的、かつSF的な発想やメッセージ性で徐々に読者が増え、マニアとも呼べる読者層も生み出している。

私たちは私たちが徐々に死なせているのではないか

韓国ナショナル・シアターカンパニーの「ボッコちゃん～星新一 ショートショートセレクション～」は演出のチョン・インチョルの提案から始まった。派手な演出手法よりはテキストへの真面目で丁寧な取り組み、個々の役者が持っているカラーを引き出す才能、各デザイナーの卓越した選択と共同作業など

でその実力を見せてきたチョン・インチョルは、2015年頃、星の作品に出会ってすぐに一目惚れし、いつかはと舞台化のアイデアを温めてきたという。彼は多様な時代・空間を行き来する星の多くの作品から「私たちは結局、直接・間接的に誰かを死なせている」という共通のメッセージを持つ6本のショートショートを選び、舞台化を実現した(そういうコンセプトでソウル初演時のタイトルは「私は殺人者です」となった)。



イラスト原画:真鍋峰(ミズノヤマカミ) 1979年1月号/早川書房 | 表紙(原画) 愛媛県美術館所蔵



©Nah Seung-yeol, provided by National Theater Company of Korea

天才作家、誠実な演出、斬新な振付、多彩な役者の組み合わせ

初演の舞台からまた更新された「ボッコちゃん～星新一 ショートショートセレクション～」は6本のショートショート、「ボッコちゃん」「知人たち」「おーい、でてこーい」「鏡」「宇宙の男たち」「ひとつの装置」の順番に繰り広げられるオムニバス形式をとっている。原作の言葉や良さを最大限に生かしながらも、それを一つの舞台として完結させるためもっとも工夫をしたのが舞台装置と映像。ベーシックなコンセプトにバリエーションを加え、観る側の集中力を失わせないようにしている。その舞台装置の上で、7人の役者たちの身体が作り出す動きや、それによって生み出される造形美は感嘆を呼び起こす。加えて、役者たちが各ショートショート・シーン毎にふてふてしくマルチに役をこなすのも、観る側に思わぬ面白さと発見の楽しさを与えてくれる。

観客動員、口コミ、受賞が証明した作品

「恐怖と愉快さを同時に感じさせる不思議なファンタジー」「SF演劇のしかるべき舞台」「なぜ星新一を今知ったのか」など一般の客や、批評家、科学者などが口を揃えて賞賛した。こういった評判が追い風ともなり、2018年1月に発表された、韓国でもっとも長い歴史と高い権威を誇る東亜演劇祭で演出賞(チョン・インチョル)、舞台芸術賞(照明デザイナー)、演技賞を受賞した。東京公演の前の4月に予定されているソウル再演を待ち焦がれている人も少なくないようだ。

今まで日本で紹介されてきた韓国演劇とは一味違う、名前にふさわしい韓国ナショナル・シアターカンパニーの代表作が、星新一の母国である日本でどう受け止められるのか、とても楽しみである。

文:コ・ジュヨン(舞台芸術インディペンデントプロデューサー、日-韓翻訳者)

5月30日(木)～6月2日(日) 詳細はP14へ
シアターイースト

作:星新一

脚色・演出:チョン・インチョル

出演:韓国ナショナル・シアターカンパニー

(National Theater Company of Korea)

www.tmt-bokkochan.com



星新一 ©星ライブラリ | チョン・インチョル ©Nah Seung-yeol, provided by National Theater Company of Korea

「お気に召すまま」

作：ウィリアム・シェイクスピア

演出：熊林弘高

劇場の森で、愛について 考えてみたいなら

丹念な戯曲の読み込みと、深い演技を引き出す眼力で
成果を上げてきた、近現代シリアス家庭劇の専門家。
その新しい一歩とは。演出家・熊林弘高に訊く。

選んだのは、まさかのシェイクスピア喜劇

2016年の「かもめ」が閉幕して、ただちに、東京芸術劇場と演出家・熊林弘高は次回作の検討に入った。熊林弘高は振り返る。

「(満島)ひかりちゃん、坂口健太郎さんと何をやるかという大前提のテーマがあったので、『ロザリンドとオーランドーがいいんじゃない?』と考えて『お気に召すまま』に決めました」

さりと語るが、この作品の選定には、「おや?」と思う人も多いかもしい。熊林弘高といえば、これまで、ジャン・コクトーの『おそろべき親たち』や、清水邦夫の『狂人おもて往生をとぐ』、ユージン・オニールの『夜への長い旅路』、そしてチャーホフの『かもめ』といった、近現代のシリアスな家庭劇を好んで取り上げてきた人。ところが、選んだのは、シェイクスピアの喜劇。

「自分でも、シェイクスピアを演出するとは思っていなかった。『今度シェイクスピアを演出するんだけど、作品は何だと思う?』と周囲の人にクイズを出しても、『お気に召すまま』を的中させた人は皆無でした。ちなみに、得票トップは『マクベス』だったそうだ。では、『お気に召すまま』のどこに魅かれたのか。

「尊敬する演出家のパトリス・シェローが、2013年に没しなければ『お気に召すまま』を演出するはずでした。彼の『お気に召すまま』のフランス語台本を担当した詩人イヴ・ボヌフォアの翻訳は、セクシュアリティや雑糞さに満ちています。「性」を前面に打ち出したその翻訳のおかげで、『お気に召すまま』の人間関係の深いところが見えてきた。『お気に召すまま』はジェンダーの問題が重要だと気づいたんです」

森を舞台に描かれたのは、愛のプリズム

『お気に召すまま』は、公爵領を追放され、アーデンの森に逃れたひと組の男女の恋物語を中心に展開する。女の名はロザリンド(満島ひかり)、男の名は



オーランドー(坂口健太郎)。追放の身となる直前、ふたりはただ一度出会って、たちまち恋に落ちる。ロザリンド

は、放浪の旅の危険に備えて、男装のギャニミードとなっているので、オーランドーは、彼女に森で再会しても、それが愛する人とは気づかない。おなじみシェイクスピア喜劇の変装のドタバタと、森の中で出会うユニークな人間たちとのにぎやかなやりとりが楽しい。

「森と言っても、今でいう樹海のような恐ろしいところ。人間の獣性があらわになる場所です。シェイクスピアは、その森を舞台に、さまざまな愛のプリズムのような世界を描きました。例えば、ロザリンドは、異性愛と同性愛の間を揺れ動きます。ひと目惚れをした相手は男性のオーランドーですが、一方で、放浪の旅をするにあたって、男装を選び、自らギャニミードという偽名を使います。シェイクスピアの時代、このギャニミードという名前を聞いただけで、観客は同性愛であるということがすぐわかったそうです。一方のオーランドーは、ところかまわずロザリンドの名前を彫りつけてしまうような、想像の中に惑溺する恋の病の青年。森の中の住人には、男性同士の関係や、性病や、獣姦の言及さえある。人を愛するとはどういうことか。それを描くなら、性というものを描かずに済まないということ。やっぱりシェイクスピアはすごいと思いましたね」

「ロザリンドはとてもむずかしい役だけど、彼女にはピッタリ」と信頼を寄せる満島ひかり、「水のような存在感。でも、見えないすりガラスの向こうから、予測のつかない何かが出てくる」という坂口健太郎のオーランドーをはじめ、中嶋朋子、満島真之介、中村蒼、小林勝也、山路和弘の熊林演出経験組に、温水洋一、萩原利久、碓井将大、広岡由里子、久保耐吉、ティ龍進、YUQIの熊林演出初登場組を加えた豪華なキャストチーム。劇場の森で、愛について考えてみたいなら、迷わずこの作品を選んでほしい。

取材・文：戸塚成

7月30日(火)～8月18日(日) プレイハウス 豊橋、新潟、兵庫、熊本、北九州公演あり www.asyoulikeit.jp

詳細はHPへ

演出：熊林弘高 作：ウィリアム・シェイクスピア

出演：満島ひかり 坂口健太郎

満島真之介 温水洋一

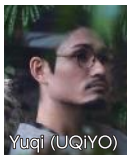
萩原利久 碓井将大

ティ龍進 Yuqi(UQIYO)

広岡由里子 久保耐吉

山路和弘 小林勝也

中村蒼 中嶋朋子



©+act./sai

東アジア文化都市2019豊島スペシャル事業 中国国家話劇院「リチャード三世」中国語上演(日本語字幕付)

4月5日(金)~7日(日) プレイハウス

詳細はP11へ



京劇×中国現代演劇×シェイクスピアの融合

中国で最も歴史があり最多のレパートリーを誇る中国国家話劇院。ロンドンオリンピック関連事業「ワールド・シェイクスピア・フェスティバル」でロンドン・グローブ座の招聘で上演した本作は、国内演劇を常にリードし続ける演出家・王晓鷹(『蘭陵王』『霸王歌行』)による中国の伝統的な演劇の技巧や文化的要素を盛り込んだ演出が「魅惑的だ」と絶賛され、高い評価を獲得、現在に至るまで世界各地で上演を続けている。京劇独特のからっぽに近い舞台の上に、宮廷の密室やロンドン塔の牢獄、ロンドンの街角、そして血なまぐさい戦場を、本作で俳優が身一つで描き出していく。中国国家芸術院団「優秀演目賞」「優秀俳優賞(張皓越/リチャード三世)」受賞。

作:ウィリアム・シェイクスピア 演出:王晓鷹(オウ・ギョウヨウ)
 出演:張皓越(チョウ・コウエツ) 涂松岩(ト・ショウガン) 田征(デン・セイ) 余南南(シャ・ナンナン)
 張鑫(チョウ・キン) 李暉(リ・ヨウ) 王顯樺(オウ・コウカ) 李建鵬(リ・ケンホウ) 王力夫(オウ・リキフ)
 鄒一正(スウ・イツセイ) 張志勇(チョウ・シユウ) 蔡景超(サイ・ケイチョウ) 打楽器:王佳男(オウ・ケイナン)

「K.テンペスト2019」

5月22日(水)~26日(日) シアターイースト 5月16日(木)~5月19日(日)まつもと市民芸術館 6月海外公演

詳細はP14へ



串田版・シェイクスピア幻想音楽劇

2014年、串田和美はシェイクスピアのロマンス劇「テンペスト」を、約6週間のワークショップ・創作期間を経て『K. [串田版]テンペスト』として上演しました。詩的言語の音楽性と舞台のスペクタル性が秀逸な魅力を放つこの作品を、串田は4面囲いの客席と演技エリアが融合した小空間を立ち上げ、打楽器や声など生の音楽を奏で、荒々しく、時に幻想的に、客席までも巻き込む新たな演出で上演し好評を得ました。

今回は、初演より出演する大森博史に加え、藤木孝、カムカムミニキーナの松村武、注目の新人女優の湯川ひなら新たなキャストとともに創作、6月には海外公演も控える串田和美の意欲作にどうぞご期待ください。

作:ウィリアム・シェイクスピア 演出:潤色・美術:串田和美
 出演:串田和美 藤木孝 大森博史 松村武 湯川ひな 近藤隼 武居卓 細川貴司 草光純太 深沢豊
 坂本慶介 飯塚直 尾引浩志 万里紗 下地尚子

モダンスイマーズ 結成20周年記念公演「ビューティフルワールド」

6月7日(金)~23日(日) シアターイースト

詳細はP15へ



蓬萊竜太の演劇体幹を鍛える劇団公演の新作

結成20周年を迎えたモダンスイマーズがシアターイーストで新作を上演する。作・演出の蓬萊竜太は、新国立劇場の『消えていくなら朝』が今年の「悲劇喜劇」賞を、パルコ劇場の『母と惑星について、および自転する女たちの記録』が2017年の鶴屋南北戯曲賞を受賞したが、その演劇体幹を鍛えているのは間違いなく劇団公演。昨年、やはりシアターイーストで「句読点三部作」を連続上演し、再演の意味や可能性を追求したあとだからこそ期待が募る。モダンスイマーズの新章を楽しみに待ちたい。

文:徳永京子

作・演出:蓬萊竜太
 出演:津村知与支 小椋毅 生越千晴 古山憲太郎 西條義将(以上モダンスイマーズ)/吉岡あきこ 成田亜佑美/菅原大吉
 【お問合せ】劇団窓口 ヨルノハテ 070-1483-2563

COMING UP NEXT 2019.7-9

演劇・ダンス ラインナップ

7月26日(金)~28日(日)

シアターイースト

芸劇dance

イデビアン・クルー新作「幻想振動」

8月31日(土)~9月1日(日)予定

シアターイースト

「めにみえない みみにしたい」

作・演出:藤田貴大

9月20日(金)~9月29日(日)

シアターイースト

eyes plus

贅沢貧乏「ニューヒューマン(仮)」